

上村吉太郎／咲くやこの花インタビューvol.38

上村吉太郎(かみむら・きちたろう)【令和4年度 演劇・舞踊部門[歌舞伎】】



令和4年度「咲くやこの花賞」《演劇・舞踊部門》は、歌舞伎俳優の上村吉太郎さんが受賞しました。古典から新作まで幅広く演じ、「上方の味や古典の匂いを身に着けていることは芸の継承に大きな武器となり、上方歌舞伎に光をあてる存在」と贈呈理由にあるように、今後の活躍が期待される歌舞伎俳優のひとりです。2007年、6歳で上村吉太郎を名のり初舞台。2009 年には片岡我當の部屋子となり、今や「家族のような存在」という師匠の上村吉弥さん入門した吉太郎さん。歌舞伎への真摯な思いはもちろん、俳優としての展望など、とても丁寧な語り口でお話してくれました。なお、取材は2023年1月下旬に行いました。

取材・文／岩本和子

「現代劇の世界も踏み入れてみたい」

受賞、おめでとうございます。受賞されての心境をお聞かせください。

「咲くやこの花賞」は、なんせ師匠(上村吉弥)が受賞されたので、存じておりました。とても光

栄でございます。師匠は 32 歳の頃に、4 回目でお取りなっただけなんですけれども、それよりもずいぶん早くに受賞してしまいまして、自分でいいのかなという気持ちもあります。けれども、上方を担う歌舞伎役者として責任重大な気がして、身が引き締まる思いでございます。

21 歳での受賞となりました。「まさか自分が」というのが正直なお気持ちですか？

そうですね。2022 年は自分にとって大きな年ではありましたが、まだまだ賞を受賞できるような役者でもないと思っておりました。



大きな年というのは？

昨年は、5 月の『歌舞伎鑑賞教室』（南座）での「吉野山」の佐藤忠信や、8 月の坂東玉三郎さんの特別公演（南座）の「東海道四谷怪談」のお梅など、一つひとつ、とても大きなお役をいただき、大きく成長できたかな、歌舞伎界からも、お客様からも、少しは認めていただけたのかなという 1 年でもあったので、その中でこの賞を受賞できて本当に嬉しいです。

「咲くやこの花賞」を受賞されたことで責任も重大とのことでしたが、大きな役を立て続けに経験されて、特に上方歌舞伎に対して新たな気持ちが芽生えることはありましたか？

何と言うのでしょうか、昨年は、高校を卒業して、大人の歌舞伎役者として出させていただけようになったので、考えることも増えました。一番の憧れは師匠で、師匠のような上方歌舞伎に必要とされる役者になりたいと常々思っておりますが、二十歳を過ぎての 1 年は、考えることが全然違います。上方歌舞伎界は、山城屋さん（坂田藤十郎）や、（片岡）秀太郎旦那、（坂東）竹三郎旦那など、とても大きな役者さんが立て続けに亡くなられて、その影響もすごく大きかったですし、焦りとか不安がすごく多くなってきたのですが、そういう中でも師匠の存在

の大きさを実感して。修業させていただいている身なので、責任も大きく感じましたし、「上方役者として」ということもすごく大切に思わなければいけない。ちゃんと考えなきゃ、このままだと本当に(歌舞伎が)なくなっちゃうと思うんです。なので、しっかり受け継いでいきたいですし、自分にできることがあればしたいなと思っています。

焦りや不安が多くなるというのは、役者としてはまた違う段階に行った証ですよ。

そうですね。でも、この状況だと思わないといけないと思います。今、コロナ禍ではありますが、たとえそうじゃなくても、もっともっと自分たちでやっていかなければいけない。お客様も呼び込んで、若い(俳優の)方も育てなきゃいけないですし、自分たち若手もどんどん良くなっていけないと成長しない、良くなれないと思うので、そういう責任感も自分の中にあるのかなと思います。

お客様を呼び込むという点では、11月に南座で「波濤を超えて」にご出演され、影山拓也(IMPACTors/ジャニーズ Jr.)さん、嶋崎斗亜(Lil かんさい/関西ジャニーズ Jr.)さんとの共演がありました。今は「SANEMORI」にご出演されて、SnowManの宮舘涼太さんと共演されていますね。

11月の「波濤を超えて」も、今月の「SANEMORI」も、ジャニーズの方をはじめ、多方面から俳優さんが出られて、皆さんのファンの方にも歌舞伎の世界を知ってもらう、いいきっかけになったと思います。この2作品はどちらも(歌舞伎囃子方の)三響會・田中傳次郎さんがプロデュースなさっているのですが、お話を伺っていると、歌舞伎だけを売り出そうとしても限界があるのが現状で、結局は「この役者さんが出ているから絶対面白いだろう」ということになってしまいうんですよね。ただ、今回のように、歌舞伎はまったく見たことがない、興味もなかったけど、推しが出ているから観に行ってみようという感じで劇場に足を運んでくださって、「すごく楽しかった」「感動した」とか、そういう声も生で聞けました。そうやって歌舞伎を知ってもらって、「楽しい」「面白い」「綺麗」とか、いろんな感情や感覚なども養っていくことが大事だなと思います。



俳優さんとして、歌舞伎以外の俳優さんからどのような刺激を受けていらっしゃいますか。

「SANEMORI」でも思いますが、館様(宮館さんの愛称)をはじめジャニーズの方や、俳優さんもそうですが、自分の見せ方をすごくわかっていらっしゃいますよね。皆さんを拝見していて、歌舞伎がどうか、型がどうか、そういうことは関係なしに、その人の魅力、役の人物像を通しての役者の魅力が大事なのかなとすごく思いました。これからほかの演劇にも出たいなと思っているのですが、俳優・上村吉太郎として出ることになったときの見せ方とか、そういうところがすごく勉強になりました。

現代劇にもご興味があられる。

そうですね。17、18歳の頃ですが、中村獅童さんが「オフシアター歌舞伎」で『女殺油地獄』を上演されたのですが、赤堀雅秋さんが演出をされて、俳優の荒川良々(大人計画)さんがご出演されていて。僕も出させていただいて、現代劇の作り方を初めて経験させていただいて、もう全然世界が違うなと。毎日、歌舞伎では絶対になんかあったので、すごく刺激的でしたし、今もあのとき経験できたことが大きかったなと思うので、そういう場ももっともっと増やしていきたいです。現代劇の世界にも踏み入れてみたいなという思いはありますね

インタビューが始まる前に、ご自身のことを「運が良かった」とおっしゃっていましたが、「運がいい」ってめっちゃ重要な要素ですよ。

本当に必要だと思います。師匠がおっしゃっているのですが、「あんたは本当に運がいい」と。おそらく、その影響もあると思いますが…。4歳のときに師匠というすごく素敵な役者さんに会えて、歌舞伎を見に行き、楽屋にお邪魔して。それで(片岡)仁左衛門旦那や秀太郎旦那、(片岡)愛之助さん、中村吉太郎さんたちに存在を覚えていただいて…。その当時の歌舞伎を観られたことも、とても運がよかったなって思いますし、僕の祖父と師匠がたまたま同級生で、観に行かしていただいたことも運だと思います。ちょうど時期も良かったと思うんです、4歳という年齢も。



歌舞伎界に入る前から、吉弥さんをはじめ、かわいがってもらって。

歌舞伎に入門する前に、中村座を見に行ったとき、中村屋(中村勘三郎)さんが「君、歌舞伎好きなの？ 歌舞伎好きだったら早い方がいいよ！」とおっしゃって。後で、真意を尋ねたら「歌舞伎界に入るのであれば、早い方がいいよ」ということだったんですね。まだ入るとも決めていなかったのに、それもびっくりしたのですが…。当時、上方歌舞伎には子役がいなくて。僕は片岡我當旦那の部屋子になったのですが、上方歌舞伎で部屋子ができたのが、愛之助さん以来、28年ぶりでした。そういう面でもとても運が良かったなというのは思います。

まさに歌舞伎に呼ばれた感じですね。導かれたような。

そうですね…そうだと嬉しいです。ありがとうございます。



「師匠がいて、折乃助さんがいて。美吉屋一門でよかった」

大きな役が続いた 2022 年は、立ち役と女方、両方をされていましたね。

旦那から「上方の役者なんだったらどっちもできた方がいい」と常々、ちっちゃいころから言われていて。自分もどっちも好きですが、今はどっちかというと女方を勉強したいという気持ちが大きいかもしれないですね

上方の役者はどちらもできるというのは、上方歌舞伎の特徴でもあるのでしょうか。

上方の芝居は、昔から「つつころばし」と言って、ちょっとなよつとした立ち役が多いのですが、そういう役も女方ができていないと、柔らかさや雰囲気が出ないですし、仁左衛門旦那や山城屋さんのような雰囲気が出るようになるには、女方もできておかないといけないなと思って、勉強したいという気持ちはあります。あと、「女方をやりたい」と発信していくと、どこかで松竹の方が見ていてくださると思うので、なるべく発信しよう（笑）。嬉しかったのは、国立劇場での「10 月歌舞伎公演」の『通し狂言 義経千本桜』で中村梅枝さんとちょっとお話をさせていただくことがあって、その時に梅枝さんが「今、若手に本当の女方がいない」と。「吉太郎にはそうならもらいたい」ということをおっしゃって、それもあって、女方を勉強したいという気持ちが強くなりました。

ますます導かれているようですね。もし歌舞伎の神様がいたらどんな姿だと思いますか？

どんな方でしょうね…。すごい厳しい人だと思います。あと、絶対に 1 人じゃないと思います。こっちにもいて、あっちにもいてって、幹部みたいな人たちがいっぱいいて、采配しているような感じはしますね。想像したことがなかったですが（笑）、今、そんな気がしますね。

我當さんの部屋子になられて、師匠の上村吉弥さんのもとで修業されて。今も修業中という認識でよいでしょうか？

そうですね。もう常に修業ですね。

落語のような、いわゆる「年季明け」はありますか？

それはないです。歌舞伎役者を続ける限り、ずっと修業ではないでしょうか。

師匠はどんな方ですか。

本当にね、第2のお母さんって感じです(笑)。4歳のときから知っているので親戚の方という感じで、他の家からすると信じられないぐらいの師弟関係だと思います。

距離感が近い？

距離感が近すぎてたまにほかの家から怒られるぐらいです(笑)。家族みたいな師弟関係なんです。師匠がいて、折乃助さんというお兄ちゃんがいて、僕が弟みたいな。それはすごいありがたいですし、美吉屋一門でよかったなと思うことは多いですね。



「将来は、“上方の上村吉太郎”と呼ばれる存在に」

これから、どんな歌舞伎役者になりたいですか？

歌舞伎界に必要とされる存在です。名を残さないといけないですし、「上方の上村吉太郎」と呼ばれるようにならなきゃいけないなという思いは大きいですね。でも一番は師匠のような、脇を固める役者になりたいです。今は江戸が主なので、まずは江戸で使ってもらえる役者を目指して。そして上方では主を張れるような、そういうアグレッシブな役者になりたいと思います。師匠のように、古典の良さを大事にしたいという気持ちも大きいです。



古典で出てみたい作品や、やってみたい役はありますか？

最近見て思ったのは『女殺油地獄』だったりとか…。それはずっとやりたいと思っています。あとは、『夏祭浪花鑑』の団七のようなお役もやったことがないので、しっかり教わって、上方の古典もしたいなという気持ちがあります。

3月4日(土)から4月12日(水)まで、IHI ステージア라운드東京で上演される「新作歌舞伎 ファイナルファンタジーX」にご出演されますね。意気込みをお願いします。

まず、すごい挑戦だと思います。ゲームが歌舞伎になり、しかもストーリーがある、すごく素敵な作品で。僕の役は、原作のゲームでも、新作歌舞伎でも、とても重要なお役です。1月末から稽古が始まるのですが、どんなふうになっていくのか楽しみもあります。でも、不安もありました。ファンの方がすごく多い作品ですし、自分にそのキャラクターが合うのかと不安でしたが、ビジュアル撮影もして、「大丈夫、やるしかない」という気持ちになりました。IHI ステージア라운드東京は、客席が360度回転するので、お客様にはアトラクションみたいな感じで楽しんでいただけたと思います。世界観もすごいですし、360度回りますし、今しか見られない新作歌舞伎「ファイナルファンタジーX」なので、ぜひ見に来ていただきたいなと思います。

では最後のご質問です。吉太朗さんが「咲くやこの花賞」を贈りたいと思う大阪の好きなところはどこですか？

何だろう…今、「(SANEMORI)」で新橋演舞場に出ていて、ずっと東京に泊まっているので、ずっとお好み焼きが食べたくて。なので、千日前にある「おかる」というお好み焼き屋さんです。僕、本当に大好きなお店で、思い出だけでお好み焼きの口になるぐらい、「おかる」のお好み焼きを食べたいです。

